

【会場「大学セミナーハウス」(設計:吉阪隆正+U研究室)について】

人々の出会う場所「大学セミナーハウス」

東京建築士会会長 古谷 誠章

オイルショックが始まった直後の1974年に僕が早稲田大学に入学した時の新生ガイダンスでの、吉阪先生との初めての出会いはとても強烈なものでした。「君たちが卒業する頃、建築の仕事はビルのひび割れ直しぐらいしかないだろう。卒業設計で学年10位以内に入るといい建築家にはなれないよ」と、入学したての僕たちの頭を相当混乱させてくれました。また5月にはオリエンテーションが今回の会場となる大学セミナーハウスで行われ、逆さピラミッドの本館最上階での学年全員の食事会、二人ずつ泊まるユニットでの宿泊体験など、文字通り吉阪先生の洗礼を受けたような、学生生活の始まりでした。

吉阪先生のエピソードはあまたありますが、いずれも謎解

きの禅問答のようなもので、いまだに時々答えを思いつくような長持ちのする問いかけが多かったです。真に多様な価値観を尊ぶ自由人だったと思います。今のセミナーハウスには1群だけしか残っていないのが本当に残念ですが、斜面を一切造成せずに建てた7つの宿泊ユニット群とセミナールームは、200人が一堂に会する本館と、対照的な2人(本当は個室にしたかったそうです)部屋の最小単位まで、さまざまな人の集いを想定したものです。人々が出会う場所としてこれ以上ふさわしいものはないと思います。

「東京空間万博」と題された関プロ青年東京大会、多くの皆さんが集まって、是非未来につながる建築の話をしようではありませんか。

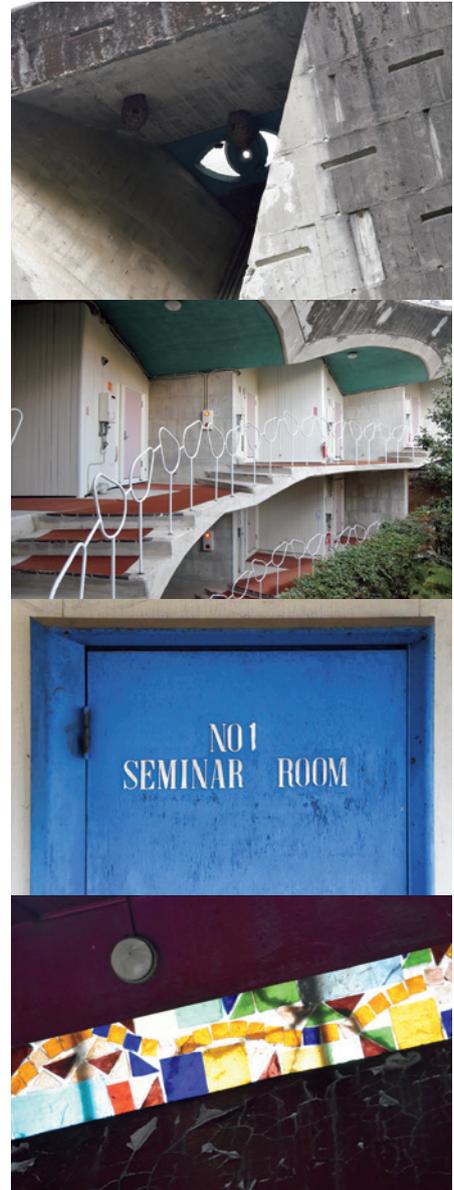
設立背景

大学セミナーハウスとは何か、という問いに対し、創設者である飯田宗一郎は「建築と人間と理念の総合である」と答えている。現在では研修施設の一般的な呼称として使われている「セミナーハウス」という施設名称は1965年の開館当時、世界のどこにもなく、飯田宗一郎自身の理念を表現すべく創った造語である。

戦後の教育改革により、新制大学は量的に急発展を遂げた。その結果、大学はマンモス化し、教育はマスプロ化するに至る。このような教育環境の中から生まれる学生の不満を解消するため、教授と学生の接触を多くし、また学生と学生の間に関係の形成を促す、人間性のあふれた場の必要性を捉えたのである。同時に日本の大学は閉鎖的であると考え、教授相互間、学部相互間のもとより、国公立大学相互の間に、まったく交流がない実情を彼は問題視した。それぞれが相互に接触し、交流する場が生まれたとき、人間としての成長に必要な経験や機会が与えられるものと考え、イメージされたのがこの「セミナーハウス」の理念である。

「人生の不思議さは、ある時、ある人に会うことである」と飯田は述べている。この実現を図ったのが本大会会場「大学セミナーハウス」である。その理念を建築化するにあたって、創意に富んだ設計が望まれた。場所としては、時間的にも距離的にも郊外にある静かな自然が良い。彼の構想に共鳴した国公立大学の賛同者が設立発起人となり、財界の支援で発足した学生のための教育の場を、吉阪がその「こころ」を「かたち」にした。1965年の竣工後も次々と建物は増えていき、さながら小さな村のようになった。しかし、近年の少子高齢化社会は、学生数の減少など、施設利用者の変化にも大きな影響を与えている。学生の教育施設として出発したセミナーハウスは、社会人の生涯教育施設への、そして、地域に根差した施設へと活動をひろげている。

また、大学セミナーハウスはモダニズム建築の重要な作品として、「DOCOMOMO Japan」に選定されている。2016年には、吉阪が1950年から2年間、パリのアトリエで設計修業をしたル・コルビュジエの「国立西洋美術館」が世界文化遺産に登録され、本セミナーハウス本館が東京都の歴史的建造物に選定された。これらはモダニズム建築がその歴史的役割を評価される時間を与えられないままに、次々と取り壊され姿を消していく現実を、押しとどめる力となっている。同時に、戦後の復興期の設計思想を、直に建築に触れて身体で学ぶ機会を、次世代へと繋いでいかなければならない。開館から60年の節目の年に何を受け継ぎ、次の60年に何を受け渡すのか、今まさに我々に与えられた「禅問答」である。



大学セミナーハウスの建築群の魅力

時を重ねた建築群からは、建築家 吉阪隆正の活動理論「不連続統一性」(Discontinuous Unity) を、組織論、設計論、造形論として読み解くことができる。そして、平和への思いから建築を志した吉阪隆正が「有形学」を提唱し、人のつながりをつくるために提案した建築の役割、形の役割の大切さを見直す機会になることを望んでいるものである。この建築は、はじめに「言(ことば)」を創ることからはじまったものであるが、大学セミナーハウスにはまつわる言説が数多く存在する。「新しい大学のありかたを、ここ柚木の丘に打ちたてるべく楔を打ち込んだのだ」「入口は狭いようでも中へ入ると広く深く、あちらこちらはずーっとつながっていて、学問とはそんなものだ」「かつてハイカーたちがゴミを残して

いった所は、人々が好んでたむろする所だ」「一人一人が己の城を持つことが、自分の意見をもつようになるもとだ」「部屋が四角いと、どうしても上下の席ができるが、多角形だとお互い同格になりやすい」「同じ中庭に面すると、連帯感が生じやすい」「二つのものが向き合うと対立が生じやすい」「遠くて不便なことが、偶然の出会いの機会をふやす」…。

その実現化の過程で、吉阪は大きく三本の柱を立てた。

- ・美しい多摩の丘陵を傷つせずに生かすこと
- ・200名をどんなグループ分けにするか
- ・大学セミナーハウスを象徴する形は何か

こうして生まれた「村」の建築群の中から、いくつかを紹介する。

〈本館〉



大地に楔を打ち込んで「ここが大学セミナーハウスだ」と主張する、象徴的な建物である。設計も終盤にさしかかり、計画がほとんど99%決定した段階における本館の形は、今のものとはまるで違ったものであった。それがあの日、ヒョイと逆さにされた模型を見て、この形態が「大学セミナーハウス」のすべてを、理念も、哲学もそして要求機能をも満足しそうだとい瞬にして感じて現在の形となった。起伏の多い土地に広場をつくり、最上階には全員が集まる食堂を配置する合理的な形でもある。



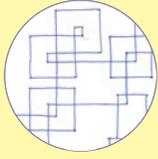
〈ユニットハウス〉



200名の想定に対し、2名1室で100棟計画された宿舎「ユニットハウス」は、当初は寝台車を並べることでも考えられていたという。そこから宿泊施設であるユニットハウスと、それをつなぐ移動コミュニティの形態に変化した。開館当初は7群からなる「村」であったが、現在は1群のみが残る。この丘陵の地形を生かしながら、一つの村をつくるように、関係を形にし、建築で人のつながりをつくる。「階段は意思、廊下と斜面は情緒、橋は夢」と設計担当の松崎義徳は語る。大半が失われた今、地域とのつながりが深まり、自然を生かす活動が展開され、セミナーハウスの追求する理想が新たな時代を築いている。



〈長期館〉



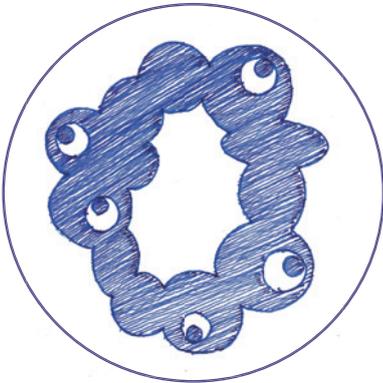
8期にわたる成長を続けた大学セミナーハウスであるが、長期館は第4期に計画された。長期滞在や、教職員や社会人の研修での利用を想定し、学会や教育団体、社会人団体の学際的研究会、シンポジウムの場として意図されたのがこの宿泊施設である。大学セミナーハウスでは、最初から「一度やったことは二度はやらない」と決められていた。長期館を計画するときには、曲線は使わない、斜めも使わない、とにかく水平と垂直で行くというものが前提としてあった。そうして生まれたのが、この「ぐるぐる、だんだん計画」である。



会場選定理由

2025年は大学セミナーハウス開館60周年の節目の年であり、大会当日は大阪・関西万博も同時開催中である。「東京空間万博2025」と題した本関プロ東京大会では、会場内の吉阪隆正の建築

群を万博パビリオンに見立て、それぞれが持つ空間の力に支えられながら空間の可能性に思いを馳せ、人々と出会い語り合う場となることを試みる。



2025年大阪・関西万博



開館60周年



パビリオン

あなたも私たちと共に大会準備から参加しませんか??
一緒に東京大会を通じて建築士会を盛り上げましょう!!

開催に向けて現在、青年委員会委員+OBOGを中心に大会実行委員会を組織して準備を進めています。「大会に興味が出てきた!」「こんな大会なら参加してみたい!」「楽しそう!」そんな方がいましたら、ぜひ私たちの仲間になっていただけませんか? 建築士会会員の方であれば委員でない方でも、40歳以上の方でも全く問題ありません。まずは事務局を通じて実行委員会までご連絡ください。

関プロ東京大会実行委員会 一同

